

ここは今と昔が活きる街

赤瓦のまち博物館

ごうつ甍回廊（いらかかいろう）

200年以上も続く
地場産の赤瓦
江津の歴史と文化を築いた赤瓦

わたしたちは赤瓦の何を知っているのだろう

さあ、まちへ出かけ
身近かにある赤瓦を愛（め）でよう
ひとつひとつのまちは
甍の回廊で結ばれ
美しい赤瓦の景観を創り出す

未来へ続く想いを伝えたい

島根 甍 江津

石州赤瓦は、この地から中国地方各地や日本海沿岸各地に運ばれ、製造技術が伝わったとされています。もしかしたら江津の赤瓦景観は、日本の赤瓦景観のルーツかも知れません…夢のある話です。

この美しい赤瓦景観を「守り、創り、伝える」。この時代に生きる私たちの務めです。かつて登り窯で焼かれた赤瓦の屋根は、葺き替えられ、解体されたりしています。歴史的にも価値のある瓦と、美しい屋根の景観が失われることが今、危惧されています。

未来に繋ぐためにも、まだまだ調査・研究が必要とされる石州赤瓦。このリーフレットが、皆さんの赤瓦に対する関心を少しでも高め、「誇りと愛着の持てる江津」にするのために…赤瓦のまち博物館にふれてみませんか。

発　行　江津市役所都市計画課
企画編集　島根県建築士会江津支部
協　力　石州瓦工業組合

お問い合わせ先／江津市役所都市計画課
〒695-8501 島根県江津市江津町1525
TEL:0855-52-2501　FAX:0855-52-1379
URL:http://www.city.gotsu.shimane.jp/
島根県建築士会江津支部
ホームページ http://www.e-iwami.com/arch-net/

※民間地を見学される方は、声がけなどマナーを守りましょう。
※展示物などは、大切に扱いましょう。

2017.3月印刷 第2版

壱 年紀のある瓦

製造された年代が明らかな赤瓦は非常に少ない。鬼瓦と呼ばれる棟の端部を納める瓦には、年紀や作者などが刻まれたものがあります。これらは研究資料としても大変貴重といえます。


寛政9年〈1797〉敬願寺（大田市温泉津町）


文政2年〈1819〉岩瀧寺（波積町）


文政4年〈1821〉八幡宮（跡市町）
［年紀のある瓦の所在不明］

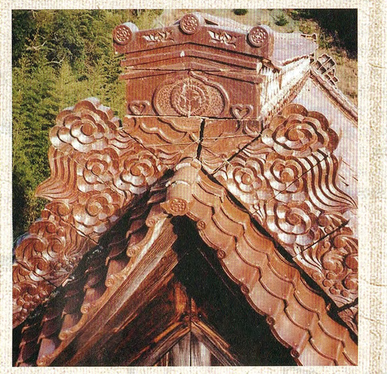

文政4年〈1821〉法正寺（黒松町）


天保13年〈1842〉藤長寺（桜江町）


慶応4年〈1868〉西暁寺（江津町）

弐 紋板

家紋が入った鬼瓦を紋板といいます。家紋部分は、現在とは異なり一体で造られていました。


浄光寺（千田町）本堂。この紋板は、巨大なため11個に分割されていました。天保3年〈1832〉本堂の建築時に製作されたものです。現在は葺き替えられて、境内に保存展示されています。


JR黒松駅（黒松町）


柿本神社（都野津町）


幕末、進駐してきた長州軍の火薬庫についていたもので、毛利家の家紋入り（江津町）


旧跡市小学校（跡市町）「アトイチ」を表した村章

参 鬼面瓦

鬼瓦のなかには、まさに鬼の顔を模った鬼面瓦があります。頭には2本の角、口には牙があり、阿吽の相をとるものもあります。古瓦として床下などに保管されている場合もあります。


法正寺（黒松町）


西暁寺（江津町）


西岸寺（都野津町）


冷昌寺（島の星町）


八幡宮（跡市町）


浄光寺（千田町）


願寿寺（波積町）


願寿寺（波積町）


霊泉寺（敬川町）


藤代酒店（都野津町）


光善寺（波積町）


高倉山八幡宮（波積町）

四 軒瓦の文様

屋根瓦の軒先には、雨水が切れやすくした軒瓦という瓦があります。この軒瓦には様々な文様が刻まれていますが、現在では統一されています。軒瓦の文様の移り変わりを見てみます（変遷区分は推定）。

【明治36年（1903）以前】


文化8年〈1811〉慈光寺（跡市町）



天保12年〈1841〉山下家（松川町）


寛政9年〈1797〉敬願寺（大田市温泉津町）


文政2年〈1819〉岩瀧寺（波積町）

【明治36年～昭和10年（1935）】 石見焼陶器製造業組合設立


さまざまな窯印が中央に入る

【昭和10年以後～現在】 石州瓦工業組合設立　（統一文様になる）


昭和12年〈1937〉花田医院（江津町）


万十は昭和50年頃から

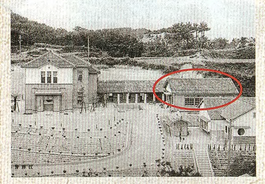
五 特異な色瓦

昭和9年（1934）、カーキ色が陸軍の軍服色（国防色）として定められました。当時、来待色や鉄砂（黒系）が主流だった石州瓦にもその影響を受け、カーキ色の瓦が製造されました。


昭和12年建築の花田医院（国登録文化財、江津町）



カーキ色の鬼瓦
都野津会館（旧都野津町役場）昭和12年築。現在は葺き替えられ、旧鬼瓦の一部が保管されています。


昭和14年建築当時の江津警察署（江津町）。武道場が江津市郷土資料館として使用。現江津市図書館の隣の建物です。

六 石州瓦の歴史年表

和暦	西暦	記事
天平13	741	・国分僧寺・国分尼寺造営。浜田市国府町で国分寺の瓦を焼いた平窯跡の発見（昭和41年）＝この頃が、石見地方に瓦が出現した時期と推測
元和 5	1619	・浜田城築城のため瓦工場が設置された
延宝 2	1674	・丸瓦と平瓦の一体化した桟瓦が考案される
享保頃	1716～	・石見焼の初期のものはこの頃に開発された錆釉がほんどやかめの大型の粗陶器に塗布されて大形の窯で焼成されたもよう
享保 5	1720	・幕府は瓦の使用を解禁。しかし、享保8年から弘化3年（1846）まで、貸付金制度を一般の民家や商家にまで適用して瓦葺きを奨励する
寛政 3	1791	・瓦葺きを禁止制限する通達（浜田藩）
寛政 5	1793	・那賀郡久代村与惣次が同浅井村の瓦屋六兵衛にあてた口上書「久代村地内に瓦土などのよい場所があるので、大変すまめが、弟子にしていただければ、油瓦師として渡世したい。御慈悲だから、御免仰付けられる様お願いする」（小川家文書）（油瓦＝来待釉瓦と考えられている）
寛政 9	1797	・現存最古の赤瓦。敬願寺（大田市温泉津町）の古瓦
寛政10	1798	・この頃より焼成方法は、登り窯形式に変り、素焼瓦が締焼瓦に移行、亀谷氏により生湯の砂小瀬で錆土の塗土による赤瓦が焼かれた。（錆釉瓦）
享和 元	1801	・瓦葺きを禁止制限する通達。許可制（浜田藩）
文化 8	1811	・跡市慈光寺本堂は茅葺きから赤瓦葺きにした。（今は庫裡に転用）
文政年間	1818～	・瓦葺きを禁止制限する通達（浜田藩）
文政10	1827	・「諸荷初穂并蔵敷口銭」（五島屋文書）に「木町石壱俵」（＝来待石）
天保12	1841	・大森代官所、「瓦職人の出稼ぎ禁止」を命じた
明治10	1877	・来待瓦が製品化
明治36	1903	・石見焼陶器製造業組合の発足
大正 2	1912	・この頃、鉄砂釉が瓦に使用される
昭和10	1935	・石州瓦工業組合設立される。『石州瓦』の名称はここから始まる。
昭和22	1947	・石州瓦工業協同組合設立
昭和25	1950	・石州瓦工業協同組合解散、新たに、石州瓦協同組合連合会設立
昭和27	1952	・石州産地、第1号トンネル窯設置
昭和36	1961	・石州瓦工業組合設立
昭和40代		・トンネル窯へ移行がはじまる
昭和45頃		・新赤瓦への転換期
昭和50頃	1975	・ガス窯普及で新来待瓦再起のきざし

（参考文献）
・「40年のあゆみ」石州瓦工業組合　平成13年12月発行
・「石州瓦史」巍田真秀　昭和47年（1972）6月
・「石見粗陶器史考」平田正典　昭和54年（1979）3月

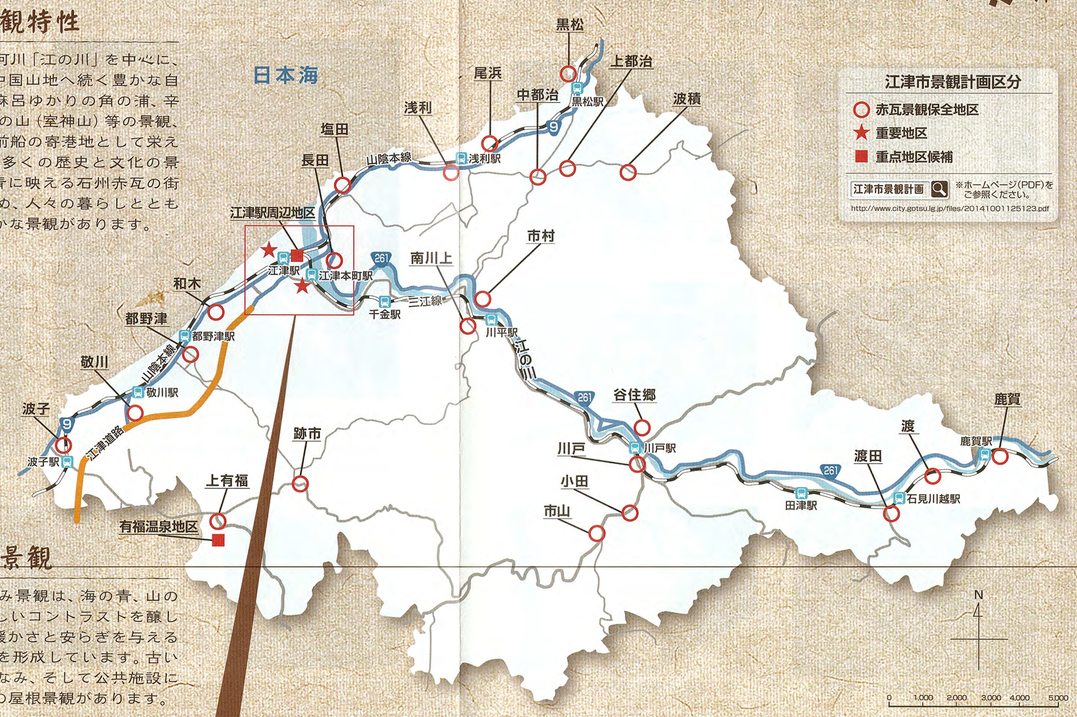
ごうつ甍回廊（いらか かい ろう）

ここは今と昔が活きる街

赤瓦のまち博物館 島根 甍 江津

江津市の景観特性

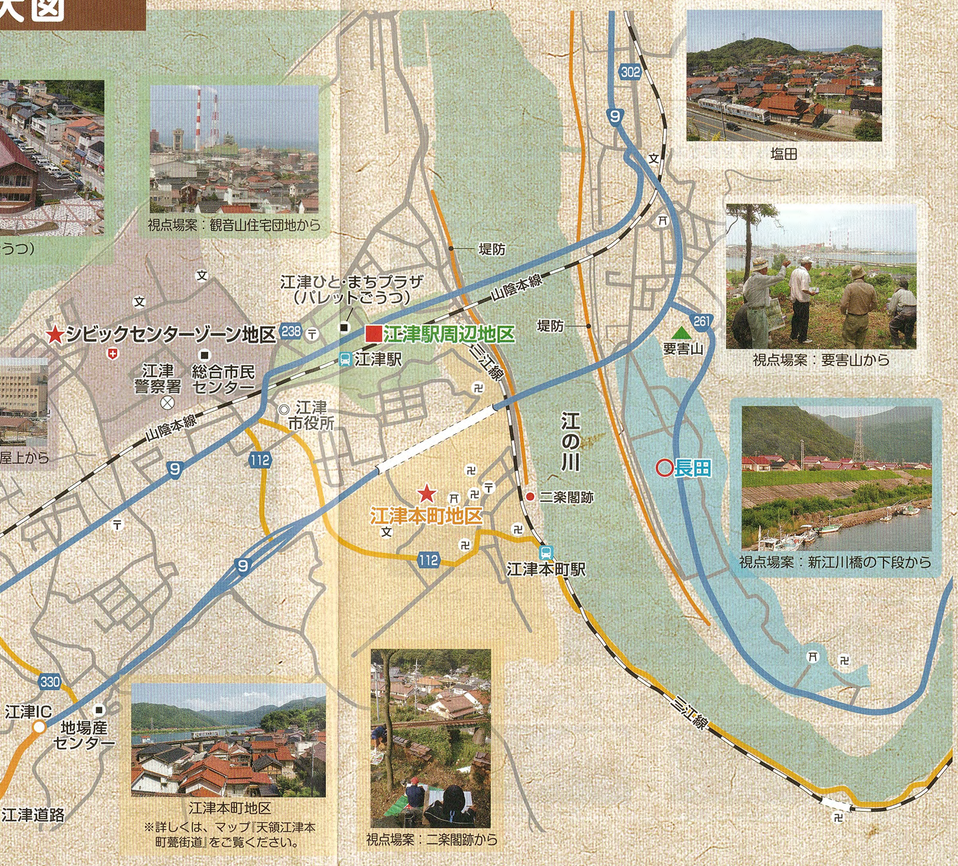
中国地方最大の河川「江の川」を中心に、西に日本海、東に中国山地へ続く豊かな自然の景観、柿本人麻呂ゆかりの角の浦、辛の崎、高角山、屋上の山（室神山）等の景観、江の川の水運と北前船の寄港地として栄えた歴史を物語る数多くの歴史と文化の景観、山の緑と海の青に映える石州赤瓦の街なみの景観をはじめ、人々の暮らしとともに育まれてきた豊かな景観があります。



石州赤瓦の景観

石州赤瓦の街なみ景観は、海の青、山の緑に映える素晴らしいコントラストを醸し出し、人々の心に暖かさと安らぎを与える心地よい生活空間を形成しています。古い街なみや新しい街なみ、そして公共施設にも美しい石州赤瓦の屋根景観があります。

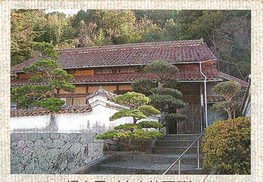
市街地 拡大図



波子町


視点場案：常福寺裏山から

敬川町


橋本屋（古来待瓦葺）

都野津町


視点場案：木村窯業所から


川本屋（古来待瓦葺）

二宮町


視点場案：君寺（紀三井寺）から

和木町


視点場案：真島から

有福温泉町

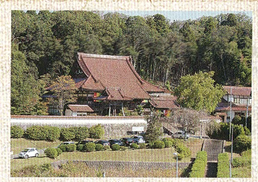

上有福


視点場案：金比羅山公園から

跡市町


旧跡市小学校

千田町


浄光寺


慈光寺　文化８年(1811)に葺き替えられた本堂の瓦を今は庫裡(右側の建物)に使用。

黒松町


視点場案：龍松山公園（法正寺裏山）から


旧黒松小学校（古来待瓦葺）

浅利町


視点場案：国道沿いから

都治町


視点場案：円光寺周辺から

波積町


波積ふれあいホール（旧波積小学校講堂）

松川町


三佛寺（古来待瓦葺）


浄国寺（古来待瓦葺）


蓮生寺（古来待瓦葺）

桜江町


視点場案：藤長寺境内から


服部商店（旧市山興業銀行）


中村家住宅（古来待瓦葺）
国登録文化財


渡会館（旧川越郵便局）